Rotary 勝山ロータリークラブ
よいことのために手を取りあおう

地区基本方針
未来へつなぐ

No. 19
令和7年12月16日発行

2025～26年度　RI第2650地区
創立 昭和36年6月28日
承認 昭和36年8月 3日

勝山ロータリークラブ週報

例会日　毎週火曜日　12：30～13：30
例会場　勝山市市民交流センター
〒911-0811　福井県勝山市片瀬町1丁目402番地
TEL 0779-87-7761　FAX 0779-87-7760
URL：https://rid2650.gr.jp/club-katsuyama
Email:katsuyamarc@gmail.com
■会長　滝川 博則　■幹事　辻 利津子
編集発行・文責　公共イメージ委員会

会長メッセージ
～　縁（えにし）を継なぐ　～

第3104回　例会　（12月9日）

●会長スピーチ　　会長　滝川 博則

皆さま、こんにちは。
本日は勝山市役所よりゲスト卓話者をお招きし、「災害」をテーマに第3弾としてお話を伺います。
せっかくの機会ですので、冒頭に少しだけ、私自身がこれまで経験してきた災害について振り返ってみたいと思います。

私が経験してきた主な災害

1）中学2年生の時の「56豪雪」
雪国に生まれ育った私にとって、初めて「自然の力」を肌で感じた出来事でした。
2）1995年 阪神・淡路大震災
テレビ越しでも衝撃が大きく、日本中が「地震の怖さ」を再認識した瞬間でした。
3）ナホトカ号重油流出事故（災害とは種類が違うが…）海岸が真っ黒になり、自然環境に与える影響の大きさを実感した出来事でした。
4）2004年 福井豪雨・新潟県中越地震
福井で甚大な水害が発生し、身近な生活インフラが一瞬で機能を失う恐ろしさを体験しました。
5）2005年 豪雪災害
「雪は生活の一部」ではあるものの、限度を超えると日常が止まるという現実を突きつけられました。
6）2011年 東日本大震災
国全体が深い悲しみに包まれ、人の暮らし、命、インフラ、防災…あらゆることを考え直す大きな契機になりました。
7）2016年 熊本地震
8）2024年 能登半島地震
私たちの暮らす北陸で起きた大地震。近隣地域の被害を目の当たりにし、「明日は自分の地域かもしれない」と胸に刻まれました。
こうして振り返ると、私は人生の中で何度も災害と向き合ってきたことに気付かされます。
「災害は忘れたころにやってくる」とよく言われますが、今の時代はむしろ――『過去の災害の記憶が薄れる前に、次の災害がやってくる』そのくらいの意識を持つべきだと強く感じています。

本日のゲスト卓話に寄せて

災害はいつ、どこで、誰の身に起きるかわかりません。だからこそ、今日のお話をしっかり伺い、備えを「自分ごと」として捉えたいと思います。
災害は“知っている”だけでは防げません。
備えを“行動に移す”ことで、初めて命と暮らしを守ることができます。
本日は皆さんと一緒に、防災意識をさらに高める時間にしてまいりましょう。

●幹事報告　　幹事　辻 利津子

○2028-29年度　地区ガバナー公示
「地区ガバナー指名委員会」が開催され、慎重審議の結果、2028－29年度当地区ガバナー候補者として、栗東ロータリークラブ会員 南 義彦 君を推薦することに決定致しました。
○2025-26年度　地区大会のご案内
2026年4月4.5日　国立京都国際会館

●委員会報告

●国際奉仕委員会　　鷲田 政憲

ボーズマンサンライズＲＣよりクリスマスカードが届きました。

●出席報告　　山内 智子

12月9日	欠席4名	80.95%
12月2日	欠席5名	76.19%

●ニコニコ報告　　笠松 誠一

届出欠席　　和田 達也

本　日 プログラム	ゲスト卓話 勝山青年会議所	12月21日 プログラム	クリスマス 家族例会	12月23日 プログラム	休会	12月30日 プログラム	休会

ゲスト卓話

防災講座～能登地震で得られた教訓と対策～

勝山市役所　防災安全専門官　松村 孝省 氏

まず、能登地震の大きな教訓として、災害発生直後の指揮・統括機能の脆弱さが挙げられます。

警察、消防、自衛隊といった専門の救助集団はいるものの、実はこれら三機関を横断的に束ねて調整するという機能が、県庁レベルでも十分ではなかったという証言がありました。

災害派遣はあくまで自衛隊の本来業務ではありません。災害対応の責任を持つのは自治体の首長であり、進出してきた外部機関を束ねて指揮をとるリーダーシップが、平時からの訓練で不可欠であると痛感いたしました。

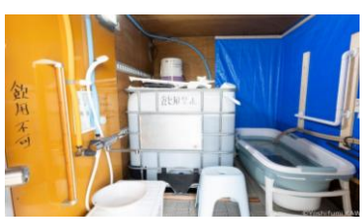
次に、人命救助のあり方です。今回は、家屋倒壊による直接的な死ではなく、「関連死」つまり肺炎や低体温症、持病の悪化などで亡くなった方の数が、直接死の2倍以上となりました。

政府内でも、これからは救助だけでなく、避難生活における「人権重視」の方向へと議論が移っています。毎日、同じ乾パンばかりを食べるような状況ではだめだ、と。

特にビッグデータで明らかになったのは、ガスと上水道が使えない地域の死亡率が非常に高かったという事実です。これは、飲料水だけでなく、衛生管理や暖房がいかに命に直結するかを示しています。皆さんには、ぜひ簡易トイレや携帯トイレの備蓄、そして井戸やガスコンロといったライフラインを補う手段の重要性も再認識していただきたいと思います。

また、避難の形態も変わってきています。指定避難所だけでなく、在宅避難や、ビニールハウスを利用したような自主避難についても、国はひとつの形態として認めました。知らない人と寿司詰めになるより、自宅や気の合う人同士で避難したいというニーズがあるからです。皆さんが、通信機器と食料を受け取りながら、自主避難者としてカウントされるという方法も今後は可能です。

最後に、今後の対策です。来年11月には防災庁が発足し、米国の国土安全保障省をモデルとした体制が整えられます。勝山市としても、本部機能を拡充するため、来年、警察や自衛隊を呼んで図上訓練を行い、災害に強い通信機器（通信衛星など）の活用を含め、準備を進めているところです。



ゲスト卓話

能登地震における避難所運営支援と保健活動～被災直後の状況を踏まえて～

勝山市健康体育課　健康増進係　山内 八千代 氏

私は、出身地の志賀町で被災し、すぐに避難所の開設と運営に携わることになりました。現場で直面した課題について、具体的にお話しさせていただきます。

まず、震度6を超える揺れは、本当に凄まじいです。家にいた時、食器棚が倒れ、娘は地面が逃げていくようで、走っているのに地面が掴めなかった、と話していました。

避難所開設時、行政の職員は被災していて誰も来られませんでした。区長や地域住民が中心となって開くわけですが、最も切迫した問題はトイレでした。

備蓄されていた簡易トイレ「ラップポン」は高性能でしたが、使い方が誰も知らず、設置も間違っていたため、すぐに使えませんでした。

子どもたちに頼んで、一人入るごとに凝固剤を入れてボタンを押す「トイレ当番」を組織し、なんとか衛生を保ちました。

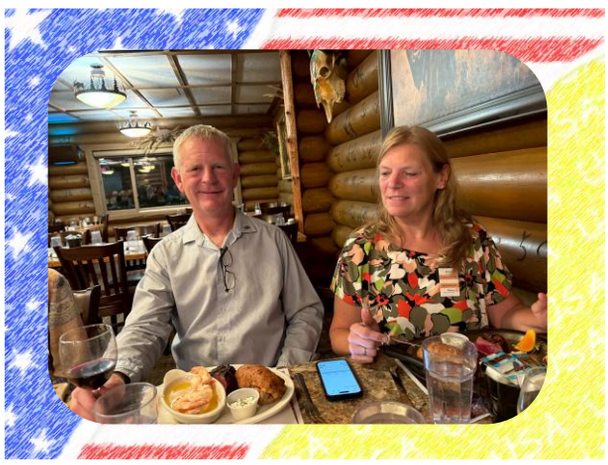
また、支援で届いた簡易トイレは全て和式で、高齢者には非常に使いづらく、失敗してしまう方も多かったのです。

さらに、健康面での対応も急を要しました。避難開始から間もないうちに、せん妄（高齢者の混乱）や、車中泊によるエコノミークラス症候群の疑い、そして明らかな脳梗塞の症状を呈した方がおり、すぐに救急搬送となりました。また、ストーブで暖をとっていた方が、糖尿病で足の感覚が鈍っていたため、低温やけどを負うといった事例もありました。

保健師が避難所に常駐することは稀です。だからこそ、避難者自身がラジオ体操を行うなど、健康管理を続けること、そして感染症対策としてトイレ掃除のポイントを皆で共有することが大切なのです。

この経験から皆さんに強くお伝えしたいのは、「避難訓練は、避難所で何を食べるか、どこで寝るか、どうトイレを管理するかを想定するところまでやってほしい」ということです。そして、日頃からご自身の健康状態を家族や地域の方と共有しておくこと。これが、災害という非常時における、最も確かな命の備えとなります。

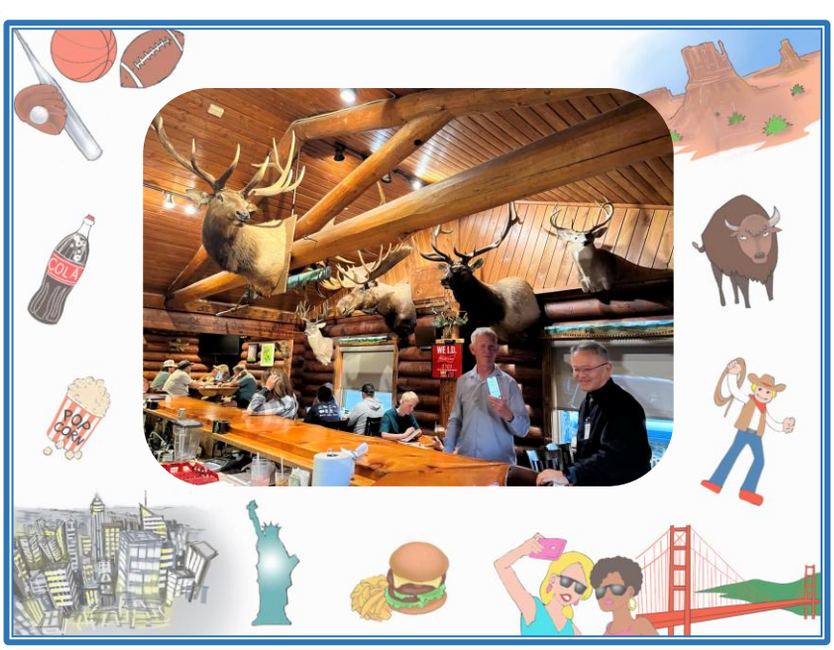
4つのテスト　①真実かどうか　②みんなに公平か　③好意と友情を深めるか　④みんなのためになるかどうか



10年ぶりのアメリカ、初めての大リーグ観戦、ホームステイ、と年甲斐もなく行く前からワクワク感で高揚していた私でした。

アメリカナイズされた日常生活を経験させていただき、人生の貴重なお時間を頂きまして感謝です。

実際、体験してみて、ザ・アメリカ家庭に入り、朝食等々ホストファミリーが一生懸命我々に気を使っていただき感動でした。

最初は日本食でおにぎりと味噌汁まで作っていただき感動いたしました。

また、自家製ハンバーグとパンケーキ、そして毎朝自家製コーヒーと、朝食には満足をして過ごさせて戴きました。